

小学校低学年の部

特選 自由図書部門

「ゆう気を出そう」

養基組合立養基小学校 二年

清水 えいすけ



ぼくが出てくる本を見つけた。どうして気持ち分かるのだろう。どこから見ていたのだろう。何回読んでもこれはぜったいにぼくのことだ。ページをめくるたび、うんうんとうなずきながら読んでいてなきたくなった。

じつはぼくは、国語や算数がとくいでない。

「このもんだいが、分かる人。」

と先生が言うと、何人か手をあげる。ぼくはなかなかあげられない。かん字や計算の答えは決まっている。もしまちがえて、頭がわるいと思われたり、笑われたりしたらどうしよう。そんなことをぐるぐるかんがえているうちに他の子が答えてくれる。ぼくが思った答えと同じいけんを言った子がまちがえると、手をあげなくて良かったとホッとする。じしんまんまんにあげている子を見て、かっこいいな、あんなふうになりたいなと思って、小さく手をあげてみるけど、先生と目が合うとやつぱりこわくなって、サッとおろしてしまふ。

そんなぼくも、道とくは大きく手をあげられる。正かいが一つじゃないから、いけんを言い合って、みんなで考えるこ

とが楽しい。

夏休みに、先生と母とぼくで話をした。そこで手をあげられない理由を伝えてみたら、

「だいじようぶ。もしまちがった答えを笑う子がいたら、先生がしかってあげるから。」

と言ってくれた。ぼくの先生と本の先生がかさなって、なみだが出そうになったから、だれもない方をむいてうなずいた。

ぼくは本に出てくる「安心してまちがえや」という言葉が好きだ。学校はまちがったことをしたらおこられるし、テストにはバツがつくけど、じゅぎようでまちがった答えを言ってもいいんだと思えた。その時ははずかしくても、まちがっていることを知らないままにいる方が、もつとはずかしいんだ。まだ、じしんまんまんに答えられないかもしれない。でも、前より少しだけ手をのばしてみよう。

蒔田晋治 作

『教室はまちがうところだ』

子どもの未来社

【講評】

挙手したいけど、なかなか勇気が出ないという素直な気持ちを書いてくれましたね。夏休み明けからは、少しずつ自分の考えを仲間に伝えようと挙手する姿が増えてきました。挑戦する気持ちが素晴らしいです。